

月刊 **みんぱく** 6月号

2024

特集
粗品



みんぱく創設50周年記念

巻頭エッセイ
万城目学

君はOTYKENを知っているか？

万城目学
まきめ まなぶ
小説家

プロフィール
1976年大阪府生まれ。京都大学法学部卒業。2006年に『鴨川ホルモー』でデビューし、『鹿男あをによし』『プリンセス・トヨトミ』など、関西を舞台にした作品が多く映像化されている。2024年、『八月の御所グラウンド』で第170回直木賞を受賞した。

ち ようど二年前、国立民族学博物館で「邂逅する写真たち——モンゴルの一〇〇年前と今」なる特別展を見学した。

その際、現在のモンゴルのヒップホップ事情を動画で紹介するコーナーに遭遇し、その映像の迫力に度肝を抜かれてしまった。

想像以上にモンゴル語とヒップホップの相性がいいことに加え、バックに流れる砂漠や高原の映像、さらには民族衣装や鷹や馬といった小道具——、演者たちは地の利、人の利、動物の利を存分に操り、言い方は悪いが、おそろしくちゃんとしたミュージックビデオを成立させていた。

興奮は醒めやらず、その後、YouTubeでモンゴルのヒップホップを探索するようになった。サジェストされるままに曲から曲へと渡り歩いた結果、モンゴルの隣国ロシアのあるバンドにたどり着いた。

「OTYKEN」
ライブ映像では、アイヌを連想させる民族衣装やメイクを施したボーカルの女性が「おー、とうー、けんー」と拳を振り上げ連呼していたので、そのあたりの読み方と思われる。

一見、ガールズバンドだが、謎の踊りを司る男と、ホーミーで重低音を奏でる体格のよい男が背後に控えている

るので、「ガールズ」というわけでもない。メンバーはシベリア地方の少数民族で、普段は山中で生活し、養蜂や漁業の仕事などをしていてるっぽい。なぜ、わかるのかというと、インスタのストーリーでそれらの様子が流れてくるからだ。

大学生の時分、フブスグル湖近くの少数民族が暮らすタイガを訪れた経験がある。二十五年前の話だ。当時、あの場所よりさらに北のシベリアど真ん中で、音楽を志す若者がいたとしても、その音が山一個を越えることすら難しかっただろう。それが今や、シベリアの森や雪原で収録した映像が軽々と海を渡り、日本まで簡単に届く。すさまじい時代である。

私が選ぶ、OTYKENオススメの一曲は「LEGEN D」だ。

聞いたことがないメロディと言葉のつるべ撃ちがひたすら楽しい。何とこの曲、グラミー賞にもノミネートされたらしい。しかし、メンバーはアメリカのステージには立てなかった。なぜなら、少数民族であつても、彼女たちはロシア人とみなされるからだ。

どれだけ彼女たちの音楽が海を越えようと、自身の身体は海を越えることはできない。こんなところにも、ロクでもない戦争の影響が顔をのぞかせている。

月刊
みんぱく
2024年 6月号

- 巻頭エッセイ
君はOTYKENを知っているか？
万城目学
みんぱく創設50周年記念
特集 粗品
- 粗品の移り変わり
横川 公子
- 魂のこもった粗品
猪瀬 浩平
- 受け取ってもらわないと、困る
伊藤 雄馬
- 古代アンデスの木製コップ
渡部 森哉
- 「これはペンですか？」
牧 奈央子
- 粗品のレシート
樫永 真佐夫
- みんなくお覽板
- 押しコレ図鑑
武器をアートに
吉田 憲司
- もっと、みんぱく
ミュージアムでお買い物
黒田 賢治
- 世界の「乗っちゃえ！」
乗ってみよう！ フィリピンのジープニー
西尾 善太
- だって調査だもの
寝込んでいても調査はすすむ？
野口 泰弥
- ばくっ！とフィルめし
アヤム・ゴレンで断食明け
廣田 緑
- 今月号の地図・編集後記

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



秋晴れのなか、おこなわれたこの年の大運動会。黄色のピブスを着た学生も競技に参加する(岩手県 大槌町 吉里吉里、2017年、明治学院大学ボランティアセンター提供)

二〇年に住民の募金によって復活した、秋の打ち上げ花火大会には、卒業生が声をかけあ

たのだと。そして、協定がなくなろうと、自分たちにとって吉里吉里は大事な場所だから、これからも通い続けるのと力強く語った。

い寄附が続いている。自分たちが見るわけでもないのにありがたい、という現地の人びとの声も聞いた。また、コロナ禍が落ち着くなかで、ふらりとやってきた卒業生とお茶を飲みながらおしゃべりをした話なども、愉快そうだった。

協定も粗品も形だけのものではない。そこに多様なつながりがあり、魂が宿る。わたしにはこの粗品のタオルが、吉里吉里とボランティアとの多様なつながりの象徴のように感じられる。だから粗末には使えない。



震災直後の2011年4月には、学生が現地活動を開始した(岩手県 大槌町 吉里吉里、2011年、明治学院大学ボランティアセンター提供)

魂のこもった粗品

復興ボランティアとコロナ

先日、「粗品」をいただいた。勤務校の学生たちが東日本大震災の発生直後から、ボランティアとして通い続けてきた岩手県大槌町吉里吉里地区でのことだ。新型コロナウイルス感染症の影響により、

二〇二〇年の春から学生の訪問が休止した。それもあり、二〇二二年から大槌町と勤務校とのあいだで締結された「ボランティア活動に関する協働連携協定」は二〇二四年度以降には延長しないこととなった。そのため、わたしは勤務校のボランティアセンター長としてスタッフとともに、これまでのお礼に訪ねたのであった。

おしゃべりや、人のたてる音

粗品をいただいたのは、吉里吉里公民館のことだ。黄緑色のタオルが、「粗品 吉里吉里大運動会実行委員会」と書かれた熨斗紙に巻かれていた。大運動会は吉里吉里の人が主催し、世代を超えて参加する秋の恒例行事で、昨年一〇月に五〇回目。粗品はその記念品である。東日本大震災で一時中断したが二

〇一四年に再開した。ボランティアとして仮説住宅支援や中学生の学習支援などに参加していた学生たちも参加し、住民の方々と交流を深めた。大運動会はコロナ禍による休止も経て、昨年四年ぶりに開催された。公民館で迎えてくれた方々は、「長い間のご支援として交流ありがとうございました。コロナと題した冊子も用意してくれていた。コロ

玉入れは大人子ども問わず大人気の競技である(岩手県 大槌町 吉里吉里、2019年、明治学院大学ボランティアセンター提供)

吉里吉里大運動会第50回記念の粗品のタオル



てきて、二階で勉強するからと賑やかにかけあがっていった。小学生たちが帰る時間はもつと賑やかだという。

これからも通い続ける

ナで学生たちが通えなかった時期に起きていた出来事がスクラップされたその冊子を開きながら、吉里吉里の復興の歩み、コロナの影響とそれからの回復、吉里吉里に通い続けた学生たち、卒業生たち、そして教職員

の思い出を語り合った。復興の音は、土木工事の音でイメージされるけれど、本当は人びとのおしゃべりとか、人が歩いている音なんだ、ということばが印象的だった。わたしたちがおしゃべりをしている間に、学校から帰ってきた中学生たちが公民館にやっ

協定の延長をめぐって、吉里吉里で活動していた卒業生の話によって教えられた。もともと吉里吉里との関係は協定によって始まったわけではない。だから、協定を結ぶにあたって活動が縛られる形になるのは違うのではないかと、現地の人たちも学生た

ち自身も語っていたのだと。そして、協定がなくなろうと、自分たちにとって吉里吉里は大事な場所だから、これからも通い続けるのと力強く語った。

いのせこうへい
猪瀬浩平 明治学院大学 教授



受け取ってもらわないと、困る

伊藤雄馬

横浜市立大学 客員研究員

狩猟採集民ムラブリへの贈り物

豚を贈った。豚肉ではなく豚だ。タイ・ラオスの山岳部に住む狩猟採集民として知られるムラブリへの贈り物だ。日本円で三万円ほど。豚一匹の命をお金で買えること自体にクラクラするが、森林開発などで森を追われ、日給一〇〇〇円ほどの畑仕事をやるムラブリにとっては三万円の豚は高いだろう。ビックアップトラックの後ろに檻ごと豚を乗せて、山道を走り村へ運ぶ。「これはチャブットか、ンガイか」とまず訊かれる。ムラブリ語では家畜の豚をチャブット、野生の猪をンガイとよぶ。チャブットのチャは「小さいもの」、ブットは「凸凹の凸(デコ)」の意味だから「デコいの」くらいの語感だろうか。

贈るならンガイが喜ばれるのだが、今回はチャブットだ。月給に相当する贈り物は



豚の毛焼き(写真はすべてタイ、2013年)



右頁:豚肉のシェアリング

受け取りづらいだろうが、受け取ってもらわないと、困る。贈る側の我々が言い訳をするハメになる。「(金は)政府がくれた」。ムラブリはこれで納得(?)してくれる。

ギフトは毒

ところで、粗品である。粗品には、「どこがだよ」とツツコミをいれながらニコニコと受け取るタイプと、「わあ、本当に」かつ「これ、どうしよう」を密かに惹起させるタイプがある。どちらにせよ、「受け取ってもらわなければ、困る」が背後にあり、「つまらないものですが」という「粗品仕草」とともに贈られる。

贈り物は難しい。贈り物は関係性に上下



上:豚の頭はシェアしない
下:ムラブリ料理(煮るだけ)

れる平等さがある。「受け取ってもらわなければ、困る」状況など起きようがないからだ。しかし、それは起きた。

一緒にフィールドにいた人類学者のニ文字屋脩さんには現地のお母さん、ヤリアムがいる。丸顔のチャーミングな女性だ。ニ文字屋さんやぼくのことをよく気にかけてくれた。

ヤリアムはよく朝食を作って持ってきてくれた。鶏ガラに水と塩をいれて煮込んだものが多かった。それが、どうしても口に合わず、完食できない。こつそり犬にあげるしかなかった。

それはヤリアムもわかっていたと思う。「美味しいかな、美味しくないかな、わからないけど」。その「粗品仕草」とともに届くスープは、彼女が村を引越す日まで続いた。

ヤリアムの「粗品仕草」は、シェアリングの感性から来ていたのかもしれないと、この記事を書きながら思った。「料理を作った、彼らの口に合わないことはわかる、けれどシェアしなければ、彼らは家族なのだから」。スープの味も匂いも忘れてしまったけれど、ヤリアムの困った笑顔は今も懐かしい。

シェアリングに似つかわしくない「粗品仕草」

そんなムラブリに「粗品仕草」は似つかわしくない。シェアリングには、無条件に配ら

を生み出すからだ。英語の gift と同語源のドイツ語の Gift が「毒」を意味するのうなずける。ムラブリは平等を好み、そんな「毒」を避けるためか、徹底したシェアリングをおこなう。贈られた豚は、額を丸太で碎かれ、毛焼きされ、捌かれたのち、村のすべての世帯に行き渡るよう、各部位を細切れにされる。「あなたは心臓、ぼくは肝臓」などの取引はない。どれだけ少量でも、すべての部位が届けられる。



ヤリアム(中央)とニ文字屋脩(右)さん

特集 粗品

古代アンデスの木製コップ

わたなべ しんや
渡部 森哉
南山大学 教授

コップ酒を酌み交わす

遺跡を発掘するとさまざまなものが出土する。それを何らかの基準にしたがって分類する。例えば素材の種類によって、石器、土器、骨角器、木器、金属器などと分ける。そして同じ素材であっても、作りの良いものとそうでないものを分けることがある。



太陽とコップで酒を飲み交わすインカの武將
出典：Guaman Poma ca.1615, Nueva crónica y buen gobierno, 149[149]

土器の場合、精製土器と粗製土器という分類がある。質の異なるものが同じ文化のなかに共存している場合、それらをどのように理解すればいいのであろうか。

ここでは古代アンデス文明を事例として考えてみたい。古代アンデスでは、酒の振る舞いが重要であった。インカ帝国は一五世紀から二六世紀にかけてアンデスに台頭した。

地方のインカの遺跡まで含めて、ほぼすべての場所を確認されるのは、尖底の酒用の壺である。

お酒は基本的にコップを用いて飲み交わされた。インカ帝国のコップの基本は、ケロとよばれる木製コップである。一リットルぐらい入るサイズのものが多く、そしてこれは二つ一組で製作、使用

された。

「酔っぱらい」の習慣!?

コップで酒を飲み交わす習慣はインカ以前から始まっていたようである。アンデスの人びとは頻繁に、そして大量に飲酒した。そうした習慣をスペイン人は「酔っぱらい」の習慣と評した。スペインの植民地下でアンデス文化のヨーロッパ化が進んだが、飲酒の習慣だけはやめさせることはできなかった。酒を飲ませなかったら働かなかったのである。

そのため、こうしたコップは大量に作られた。木製のものが多く、有機物であるため腐食し、ほとんど残っていない。金属製のコップもありアキリヤとよばれた。金属製は身分の高い人相手に使用していたようであり、木製はより一般的に用いられた。

一義的には酒を入れる器であるが、こうした道具からアンデスの互酬文化を理解す

木製のケロの破片。テルレン=ラボンバ遺跡出土。後9-10世紀



インカ様式の酒壺。アリバロスと一般的によばれる。タンタリカ遺跡出土。後15-16世紀



エル・パラシオ遺跡で出土したケロ形土器。太いタイプのコップである。後9-10世紀

ることができる。もの自体よりも、酒を飲み交わすことが重要であった。大量の酒壺が製作され、コップで酒を飲み交わし酔いしれた。それは臣民が王のために働いた見返りであり、人間関係を円滑にするための潤滑油であった。

しかしそのコップは保持することよりも、使用して関係性を維持することに意味があったため、相続されるわけではなかった。

長く使い続けられたケロ

わたしが発掘したインカ帝国に先立つワリ帝国時代の遺跡エル・パラシオでは、建築物のつくりかえの際、つくりの良い土器を意図的に割って埋めるという儀式がおこなわれた。そうした土器片を接合したところ、ケロ形の土器が二つ一組で製作、使用されていたことがわかった。また両手で持つサイズの大型のケロ形土器もあった。他の遺跡でも大型の瓶や壺が意図的に割られていることがわかった。同時代の遺跡パレドネスでは上げ底のケロ形土器も見つかった。また別の遺跡では木製のコップも見つかっている。

酒壺もコップも大量に作られて、消費された。また手をかけて織り込まれた大切な織物が祭りの際に燃やされたという。立派なものも燃やされたという話は、逆にあまり大切でないものは長く使用されたのかもしれない。贈与交換におけるつまらないモノ、粗品を考えるひとつのヒントになるであろう。



左頁：エル・パラシオ遺跡。後9-10世紀。建物のつくりかえの際などに、大量の酒が飲まれ、土器が割られて埋められたと考えられる。動物の骨も大量に出土することから肉もかなり消費されたと思われる（ペルー カハマルカ、2012年）

「これはペンですか？」

まき なおこ
牧奈央子

粗品ペンコレクター

N700系のボールペン、新幹線らしく青地に白がカッコいい



わたしが「字の書いてあるボールペン」を集め始めたのは小学校高学年のころだろうか。きっかけは覚えていない。当時、海外出張が多かった父からは、世界各国のホテルのボールペンなどを提供してもらい、大いに貢献してもらった。キャップ付き、ノック式の量産型ペンに社名や商品名、〇〇周年記念、標語、セールスマンの名前などの印字があるものがほとんどだが、ペンそのものからオリジナルで作られた高級品（？）もある。熱心に集めていたのは大学生くらいまでだが、その後もめずらしいペンに出会うと、使い切っても捨てずに残すという習性は続いた。走り始めたばかりの新幹線のぞみN700系の車中でアンケートに答えてもらったペンは宝物級である。

あらためて分類してみると、ホテル、メーカー、ショップ、保険会社、官公庁、テレビ局、通信、製薬、銀行、学校、テレクラ、その他、数としては一五〇本くらいで、たいして多くはなかった。さて、このなかで純粋な「粗品」はどれか。ホテルやテレクラのペンは「粗品」といえるのか？

わたしは気が付いてしまった。「字の書いてあるボールペン」が「粗品」となるのは、それが「粗品」と書いた袋や箱に入れられるか、もしくは「粗品」として渡されるときである。最初の英語の授業で習った「これはペンです」のくだり。多くの人が、見たらわかるやろとツッコむこのフレーズがここで活きる。「これはペンですか？」いいえ、これは粗品です



粗品のレシート

かしなが まさお
榎永真佐夫

民博教授

ベトナムで外資系コンビニエンスストアが増えている。おかげで外国人にとって街は暮らしやすくなった。たとえ店員さんが顔なじみでなくても、ぼったくられる心配も値段交渉の必要もなく、定価で商品を購入入できるからである。

昨年訪れたホーチミン市でコンビニにいったときのこと。某メーカーのミネラルウォーター三本セットがお手頃価格だったのでカゴに入れた。レジに進むと、若い女性店員さんが、こちらに一瞥することもなく「ノートはただ」とつぶやきな



渡された粗品のノート

がら手元のケースから新品のノートを一冊取り出し、商品とともにレジ袋にねじ込み渡してくれた。

レシートには、メーカーからの粗品のはずのノート代約二四〇円が……だがその下に返金が記載され、差し引きゼロになっていた。

粗品の値段がレシートに書かれているなんてベトナムらしい、と苦笑した。いくらのものをただでもらったのかはベトナム人にとって重要なのだ。他にこんな理由があるかもしれない。

各店舗はメーカーの要求どおりのサービスを提供しなくてはならない。とはいえ、メーカーにとってサービス店



舗側に任せてしまうと危険だ。客に提供されるはずの粗品を店舗側がよそに売っ払い、得た金をネコババすることだってできるからだ。実際、ちまたの薬局では横流しされた海外からの援助物資の医薬品がふつうに売られている。同様のことはよくある。察するに、店舗側が粗品を客に渡した証拠を、メーカーのためにレジ機に記録しておく必要があるのだ。

上：商品に値札を付ける店が増えているが、値段交渉は可能（ホーチミン市 ベンタイン市場、2023年）

下：家族経営の食堂などで、客との現金の受け渡しの一切を女主人が取り仕切るのがふつう（ハノイ市、2014年）

粗品の値段として4万ドン（約240円）がしるされたレシート。同額が返金されている（ホーチミン市、2023年、一部加工）



みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

みんなく創設50周年記念特別展

日本の仮面

―芸術と祭りの世界
会期 6月11日(火)まで
会場 特別展示館



平塩舞楽
(山形県 寒河江市)

みんなく創設50周年記念企画展

「水俣病を伝える」

会期 6月18日(火)まで
会場 本館企画展示場



関連イベント

創設50周年記念みんなく映画会

「水俣」揆 ―「一生を問う人々」
日時 6月8日(土)13時～16時
(12時30分開場)

会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員350名)
解説 吉永利夫(一社)水俣病を語り
継ぐ会理事)

司会 平井京之介(本館教授)
参加費 要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要

※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本
館2階会場前にて展示観覧券を確
認後、入場整理券を配布します。

※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
▶一般受付 6月5日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

みんなく創設50周年記念 特別研究シンポジウム

ポスト国民国家時代における民族 ―希薄化する概念、実体化する集団

特別研究「ポスト国民国家時代における民族」では、現代における民族の編成過程を文化、政治、経済、社会、環境等の全体的な視点から捉えることを試みています。本シンポジウムでは、博物館、国家、歴史、宗教、暴力をテーマとする5つのプロジェクトを通して、特別研究全体がもつ射程を提示し議論します。

日時 6月29日(土)13時～17時
(12時30分開場)

会場 本館2階第5セミナー室
(定員70名)

趣旨説明 宇田川妙子(本館教授)
発表者 鈴木厚志(本館教授)

野林瑞志(本館教授)
松尾瑞穂(本館准教授)

奈良雅史(本館准教授)
丹羽典生(本館教授)

コメント 平井京之介(本館教授)
齋藤剛(神戸大学教授)

主催 国立民族学博物館
後援 日本文化人類学会

【申込期間】6月24日(月)17時まで
※事前申込制(本人を含む3名まで)、
先着順、参加無料

詳細は二次元コード
(QR)から
【お問い合わせ先】
本館研究協力課国際協力係
kokyoku@minpaku.ac.jp



創設50周年記念みんなく映画会

「TRIO」

ダウン症のある息子を周囲の差別や偏見から守るため、母は人里離れた場所から暮らすことを選択します。モンゴルの雄大な自然のなかで、2人の時間は静かに流れていくのだが、世界各地の映画祭で多くの賞を獲得しました。

日時 7月13日(土)13時30分～16時
10分(13時開場)

会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員350名)

解説 島村一平(本館教授)

司会 信田敏宏(本館教授)

参加費 要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要

※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順
※事前申込の方へ、当日11時から本
館2階会場前にて展示観覧券を確
認後、入場整理券を配布します。

※受付期間中に定員に満たない場合
のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
▶一般受付 6月10日(月)～7月10日(水)

【お問い合わせ先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)

【申込期間】6月17日(月)～7月17日(水)

【お問い合わせ先】
国立民族学博物館

音楽の祭日 Fête de la Mu-

特別展開演ワークショップ

変身体験！お祭りの仮面を作ろう

※当日受付のみ、先着順、参加無料(展示をご覧になる方は、展示観覧券が必要です)
※入場整理券を各部開演30分前から本館2階会場前に配布します。
※満席の場合は入場いただけません。

みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

日時 6月2日(日)11時～12時、13時
～14時、14時30分～15時30分

会場 本館1階エントランスホール
(定員各回8名)

対象 5歳以上(4歳以下は保護者同伴)

※参加無料、当日予約(受付は各回15分前より、会場にて)

【申込期間】6月17日(月)～7月17日(水)

【お問い合わせ先】
国立民族学博物館

【申込期間】6月17日(月)～7月17日(水)

【お問い合わせ先】
国立民族学博物館

【申込期間】6月17日(月)～7月17日(水)

【お問い合わせ先】
国立民族学博物館

本の紹介

劉麟玉、福岡正太 編著
『音盤を通してみる声の近代』
―日本・上海・朝鮮・台湾―
スタイルノート 3,300円(税込)

20世紀に入り、日本、中国、台湾、朝鮮においても、蓄音機が急速に普及し、歌、演説、映画説明、戯劇など、多くの音盤が発売されました。本書はレコードが東アジアの「声」に与えた影響について論じています。



河合洋尚、奈良雅史、韓敏 編著
『中国民族誌学』
―100年の軌跡と展望―
風響社 3,960円(税込)

本書は中国を対象とする人類学的研究(=中国民族誌学)の「知られざる」理論的知見を中国研究者と非中国研究者の双方に示すと同時に、中国に関心を持つ一般読者に向けて人類学の知見を紹介することを試みています。



風間計博、丹羽典生 編著
『記憶と歴史の人類学』
―東南アジア・オセアニア島嶼部に
おける戦争・移住・他者接触の経験―
風響社 3,960円(税込)

人間の感情を揺さぶる他者との接触という歴史的な記憶は、いかに活き活きと想起され、継承あるいは忘却されるのでしょうか。公的な記憶と日常生活に根差した記憶という枠組みから、東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・異質な他者との出会いの事例を人類学的に考察します。



みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第546回
6月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
神楽とはなにか？
―語意に着目した機能論的分析の試み
講師 鈴木昂太(本館 助教)

【申込期間】
▶一般受付 6月12日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第547回
7月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
内戦の過ごし方―ソロモン諸島
ガダルカナル島の人びとの紛争経験
講師 藤井真一(本館 助教)

ソロモン諸島では20世紀末に「民族紛争」と呼ばれる内戦がありました。内戦の舞台となったガダルカナル島の人びとがどのように紛争を過ごしたのかを紹介しながら「平和」について考えます。

【申込期間】
▶友の会先行受付 6月10日(月)～14日(金)(定員80名)
【お申し込み先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▶一般受付 6月17日(月)～7月17日(水)

みんなくウィークエンド・サロン

本館の研究者が「みんなくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要

6月30日(日)14時30分～15時
中国の春節
話者 韓敏(本館 教授)
会場 本館展示場(中国地域の文化展示場)

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。
【お問い合わせ先】 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第550回 7月6日(土)13時30分～15時
人類にとって宗教とはなにか
講師 竹沢尚一郎(本館 名誉教授)

人類の誕生から700万年。その長い歴史のなかで、宗教はいつはじまったのでしょうか。世界には何億もの信者のいるキリスト教や仏教が存在する一方で、日本だけにある神道や狩猟採集民の宗教も存在します。これら

の宗教は共通する特徴をもつのでしょうか。人類の歴史を振り返りながら、宗教とはなにかを考えたいと思います。

第551回 8月3日(土)13時30分～15時
古代エジプトの書字文化
―「刻む文字」と「書く文字」の世界
講師 永井正勝(本館 特任教授)

古代エジプトの文字は、神や王に捧げるべく石材などに刻まれたヒエログリフと、書記が記録のためにインクと筆で記したヒエラティックとに大別されます。本講演ではそれらの文字の違いを紹介するとともに、民博所蔵のヒエログリフ碑文を解説します。

東京講演会

友の会会員:無料、一般:500円
※事前申込制、先着順(定員50名)
※オンライン配信はありません。

第137回 7月27日(土)13時30分～15時
サウンド・アーカイブと民俗芸能の再活性化 ―みんなく所蔵東洋音楽学会資料を事例として
講師 植村幸生(東京藝術大学 教授、本館 特別客員教員)
会場 モンペル渋谷店5階サロン

60年ぶりによみがえる録音は芸能の継承や復興に貢献できるでしょうか。三匹獅子舞という民俗芸能の音源を現地の伝承者に聴いていただく「還元」プロジェクトから、サウンド・アーカイブとしての博物館の役割を展望します。

武器をアートに

よしだ けんじ
吉田 憲司 民博館長

モザンビーク内戦後

背中に赤子を背負った母親を載せて、自転車を父親が操る。横には犬が並走し、頭上には2羽の鳥が舞う。楽しい家族の姿を表現したこの作品は、《いのちの輪だち》と名づけられている。

その素材に目を凝らしていただきたい。自動小銃の銃身やピストルのグリップ。自転車のチェーンリングには、銃の引き金が弧を描く。じつは、この作品は、すべて回収された武器でできている。

南部アフリカのモザンビークでは、1975年の独立後1992年まで続いた内戦の結果、戦争終結後も大量の武器が民間に残された。現在、この武器を農具や自転車と交換することで回収し、武装解除を進めるとともに、回収された銃器を用いてアートの作品を生み出し、社会の安定化に貢献しようという、「銃を鋤に」(TAE) というプロジェクトが進められている。

ヒントはイザヤ書「剣を鋤に」

「銃を鋤に」のプロジェクトは、モザンビーク聖公会のデニス・セングラーネ司教の発案で始められた。セングラーネ司教は、旧約聖書イザヤ書にある「剣を鋤に」という章句にヒントを得て、民間に残された武器を農具や自転車と交換し武装解除を進めることに思いをたつたという。プロジェクトは1995年

から始められた。1997年からは、その回収した武器を素材にアートの作品を生み出す作業をアーティストたちと開始することになる。

民博で収集・展示する作品は、現地のアーティストたちとのディスカッションの結果、自らの意思で武器を捨て、平穏な家族との時間を取り戻した人びとの生活を、武器と交換して得た自転車に乗る家族の姿で表現しようということになった。

それが《いのちの輪だち》(Cycle of Life)である。この作品はフィエル・ドス・サントス、クリストヴァオ・カニャヴァート(通称ケスター)とその助手たちの手で、2012年11月に3週間をかけて制作された。

破壊の道具を生産の道具と交換し、戦争の記憶を平和への道しるべに変換する。「武器をアートに」変えるTAEのプロジェクトは、アートの作品や博物館の営みが、平和構築の一助になることを示している。



夕刻の溶接作業(モザンビーク マプト市、2012年)



◆ 推しコレポイント ◆

素材になっている武器のなかで、もっとも多くみられるのは、旧ソ連製のAK47(1947年式カラシニコフ自動小銃)。それ以外に、アメリカ製拳銃ワルサーPPXも使われている。モザンビークの人びとを殺戮したのは、すべて外国の武器であった。



いのちの輪だち

標本番号 | H0274165
地域 | モザンビーク
展示場 | アフリカ展示場

ミュージアムでお買い物を

くろだ けんじ
黒田 賢治 民博 助教

思い出になるものを

ミュージアムを訪れた際、何か記念となるものが欲しい。そんなときに立ち寄るのは、ミュージアムショップだろう。展示図録や書籍、またオリジナルグッズ、あるいは開けるまでのお楽しみガチャガチャが定番の品ぞろえだ。

今やこうした空間が広がっているのは、日本のミュージアムで当たり前である。ところが、半世紀も時計の針を巻き戻すと、展示に関連するグッズなどの物品の販売をおこなう常設のショップは見当たらなかった。何を隠そう、国内でその先駆けとなったのが、一九七七年開館当初からみんぱくに設けられたそれである。

正門から向かって右側の本館出口付近には、千里文化財団が運営するミュージアム・ショップがある。展示の図録や関連書籍、世界各地の衣類や雑貨、フェアトレードの食品類に加え、オリジナルグッズを扱ってきた。海外への渡航がまだ一般的ではなかった時代には、館内の教員が調査先で仕入れてくるということもあったようだ。



本館1階の国立民族学博物館ミュージアム・ショップ(2024年)

オンラインショップの開設もかなり早い。一九九九年七月から構

えており、全国のみんぱくファンに図録やオリジナルグッズをお届けしている。けれど、手作りの商品については、一点ずつ形や色合いが異なるため、実際に訪れないと買えない物が多い。「来てもらって楽しんでほしい、展示場の思い出になるものを」をいちばんのコンセプトに営業してきた。

更新されるオリジナルグッズ

オリジナルグッズもみんぱくでしか手に入らない点が、醍醐味のひとつだ。開館当初から展示物のレプリカなどのオリジナルグッズの開発に力を入れてきた。その後も館内の教員と協力しながら、Tシャツやエコバッグ、手ぬぐいにスタンプといったグッズも開発された。保管スペースの関係から、小ロットでの生産にならざるを得ないなかでさまざまな問題とも向き合いながら努力を続けている。

開館当初からあるオリジナルグッズも今やめずらしくなった。出口のそばに置かれている砂金量り用の分銅(西アフリカのガーナ)のレプリカが、じつはそれである。ミュージアム・ショップの歴史の生き証人として、今日もひっそり見守っている。



みんぱく仮面Tシャツ

開館当初からあるオリジナルグッズ。砂金量り用の分銅(ガーナ)のレプリカ

乗ってみよう！ フィリピンのジープニー

にしお ぜんた
西尾 善太 立命館大学 専門研究員

フィリピン人にとってジープニーはどこでもあるけれど、特別なものでもある。カラフルなグラフィックが目を惹く公共交通機関は、大きな都市から小さな村まで、大人も子どもも利用している。もしあなたが観光で訪れたなら、乗ってみたいと思うだろう。けれど、地元客ばかりの居酒屋が入りづらいように、なかなか乗るのは難しい。このちよつとした難しさは、ジープニーがこの国らしい乗り物とされる理由でもある。

ジープニーは日本のバスと似ていて、ある地点とある地点を往復している。けれど、どこにも停留所はない。路上のすべてが停留所で、停めるには手を挙げて、ドライバーに合図を出さないといけない。ジープニーの行き先は、ちゃんと正面と側面に書いてある。



エンジンは日本製のトラックエンジンを転用したもの。よく故障するが、みんなで修理をする(マニラ首都圏 タギッグ市、2019年)

しかし、地図にはない略称や通称で書かれていることもしばしばだ。思い切って乗っても、地図を頭に思い描いていないと、間違ったところに連れて行かれてしまう。東京の鉄道網も複雑だが、それとは違う複雑さがこの交通機関にはあるのだ。

さて、ジープニーに乗り込んだあなたは、行き先をそこそこ大きな声でドライバーに伝えるよう叫ばないといけない。運賃はあなたの手から隣の客へとバケツリレのように渡っていく。お釣りも同じく手渡しで戻ってくる。降りるとき、「パーポ！（止まってください）」といえ、そこでジープニーは停まる。目を使い、手を使い、声を張りあげ、そうしてこの国では人が移動し



派手なグラフィックやデコレーションが施されたジープニー(マニラ首都圏 サン・フアン市、2020年)

ているのだ。日本の都市では、路線網を読み解き理解しなければならぬ。この国では、コミュニケーションを体になじませなければならぬ。

市場でたくさんのお金を買った老人が乗ってきたら、あなたも他の乗客も、荷物を車内に引き上げ、その人が席に座れるように気にかける。しかし、親切心で席を譲る感覚とは少し違う。そうしなければジープニーが動かないからやるのだ。ジープニーの中では、それぞれの乗客が役割を担っている。この交通機関は、そうやって人びとに支えられながら、人びとの生活を支えている。

だって
調査だもの

寝込んでいても調査はすすむ？

野口泰弥
民博助教



ユーコンで先住民に学ぶ

フィールドワーク中に突然やってくるものは「出会い」と体調不良である。二〇一八年八月、わたしはカ



文化キャンプでノーザンバイクのさばき方を教わる。左端が筆者(エセル湖、2018年8月)

ナダ・ユーコン準州の先住民、北トウショニーの人びとが開催した「文化キャンプ」に参加した。これは子どもたちをおもな対象に、伝統文化、特に「ブッシュユスキル」とよばれるサバイバル技術を古老たちが伝授する野外教育活動である。前年の予備調査で数日間、北トウショニーの人びとが暮らすコミュニティのひとつであるペリークロッシングを訪れただけであったわたしを、「伝統を学ぶのに良い機会だ」と友人のユージンが連れて行ってくれたのであった。

このキャンプでは狩猟罠や肉の貯蔵施設、伝統薬の製造方法など、現在では利用されなくなったものを含むさまざまなブッシュユスキルを教わった。さらに自分たちでノーザン

バイクを釣りあげて料理も作った。古老たちはいつかまたこれらの技術が必要になるときがやってくると語っていた。

「何にでも効く」伝統薬？

良い調査ができたと思んだのも束の間、最終日の夜中にひどい胸のむかつきで目が覚め、外に出るとすぐに吐いてしまった。翌朝も体調は回復するどころか悪化し、胸のむかつき、下痢、発熱に苦しむ有様だった。思い当たる節はいろいろあった。友人が「これこそ本物の水だ」と言って飲ませてくれた沢水は、苔むした岩を伝って流れていたため、ほのかに緑色をしていたし、「インディアンの・フード」だと言われてノーザンバイクの腸も食べた。さらにトナカ



4日ぶり食事がとれるようになったから8月15日はサラダ記念日(ペリークロッシング、2018年8月)

クマに気を付けるよ

この二〇一八年の調査では、わたしはおもに村の中央にある公共キャンプ場に滞在していた。文化キャンプから戻っても結局キャンプである。よろめきながらテントを張っていると、「昨日、ここで大きなクマ

ケニーは回復したわたしを本当にヘラジカ猟に連れて行ってくれた(ユーコン川、2018年8月)

が出たから気を付けろよ」と通りすがりの村人に忠告された。踏んだり蹴ったりである。気を付けろと言ったって、重い荷物を背負って移動する体力もない。仕方なしに、わたしは少しでも見晴らしの良いところにテントを張り、クマよけス

プレーを枕元に置いて、微かな物音にすら怯えつつもそのまま四日間、寝込んでしまった。

幸いにしてその後クマはあらわれなかったが、手作りの伝統薬——それは例のトナカイゴケの薬であったが——を持ってきてくれる古老や、見舞いに来てくれる人があらわれたい。毎日、見舞いに来てくれたケニー

はブッシュユスキルの達人

であり、「回復したらヘラジカ猟に連れて行ってやるよ」と言って励ましてくれた。彼とはこのときを機会にいつそ親しくなり、翌年は彼の家に滞在させてもらいながら、北トウショニーの生活について教わった。

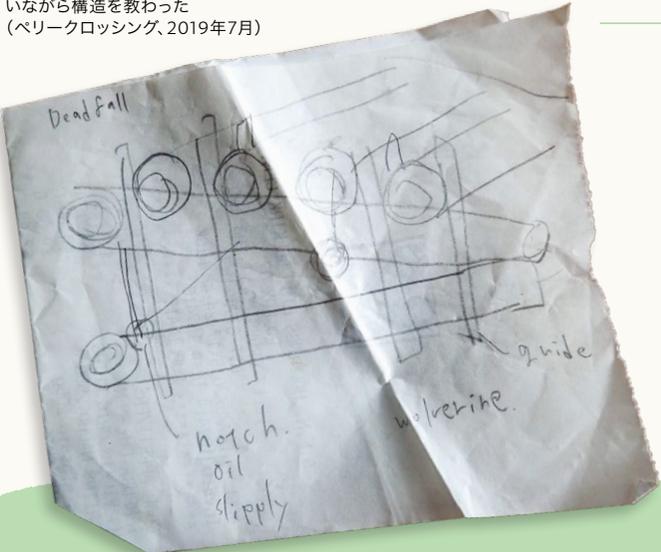
クマに怯えながら

現地の人と深く打ち解けられたのは、ちょっとした「トラブル」がきっかけだったと振り返る人類学者は多い。わたしの場合はクマに怯えながら寝込んでいたこのとき



上: 村内に仕掛けられた現代のクマ罠。ペリークロッシングではクマが頻繁に出没する(ペリークロッシング、2019年7月)
下: 著名なチーフであったケニーの父が使っていたクマ槍。迂闊にクマの話をするのは禁忌である(ペリークロッシング、2018年8月)

フィールドノート。このときは伝統的な落とし罠(デッドフォール)の製法について聞き取りをおこない、その場にあったレシートの上に絵を書いてもらいながら構造を教わった(ペリークロッシング、2019年7月)



アヤム・ゴレンで断食明け

ひろた みどり
廣田 緑 国際ファッション専門職大学 准教授

この春、インドネシアの古都ジョグジャカルタで木版画家に関する調査をおこなった。ジョグジャカルタはわたしが1999～2010年まで暮らした街だ。調査後半からは断食月が始まったので、ムスリムの調査アシスタントに合わせ、わたしも彼といるあいだは昼食を抜いた。3月13日、若手版画家5名への聞き取りを終え日没30分前になると、街中がそわそわし始めた。断食が明ける日没を待ち、おやつや軽食で空腹を満たすために屋台を探す者、家路に急ぐ者で街は溢れかえる。我々は調査地近くのアヤム・ゴレン(鶏肉の素揚げ)屋を選んだ。注文して待てば、ちょうど日没になるという計算だ。店頭には鶏肉とアヒル肉が、ムネ・脚などの部位ごと、フル・ハーフ・4分の1などのサイズごとに並べられており、いずれかを選んで注文する。注文後に調理するので、揚げたてホヤホヤが食べられる。最近ジョグジャカルタの屋台では、白米と付け合せ(生野菜と香辛料ペースト)は取り放題というスタイルが増えており、客はセルフでそれを取り、揚げたての鶏やアヒルが運ばれるのをテーブルで待つ。

インドネシア料理では鶏、アヒル、魚、テンペ(大豆をテンペ菌で発酵させたインドネシアの納豆)、豆腐などの素材に軽く下味を付けて簡素に揚げ、味付けにはサンバルを使うことが多い。サンバルとは唐辛子、ニンニク、柑橘類の葉、小エビの発酵ペーストなどを合わせ白臼でひいた香辛料ペーストで、このサンバルの味わいを引き立てるのがクマンギ(レモンバジル)だ。この葉を摘んでサンバルと合わせると、爽やかな香りと旨みのある辛さが見事に重なる。この料理は気取ってフォークを

使うよりも豪快に手で肉を割り、サンバルや香味野菜を指先で混ぜて口に運ぶのがもっとも美味しい食べ方だ。

さて注文した素揚げはテーブルに運ばれたが、客たちは皆、まだ断食明けの合図を待っている。間もなく遠くのイスラーム寺院から日没を知らせ、夕方の祈りを呼びかける声(アザーン)が聞こえてきた。その声が一段と大きくなったタイミングで、皆いっせいに食事に手をつけ始める。わたしは朝食を食べていたので、この日の断食はわずか10時間程度だったが、ジョグジャカルタで暮らしていたころの断食明けの不思議な高揚感をほんの少し思い出した。



左上:ミカンを搾って砂糖を加えたジュースと、鶏肉とテンペの素揚げに白米、数種の生野菜、サンバルを添えた一皿
右上:客の注文を聞いて調理をする厨房の様子
下:注文の後、テーブルで断食明けを待つ客たち
(写真はすべてインドネシア ジョグジャカルタ、2024年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間とおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくりられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

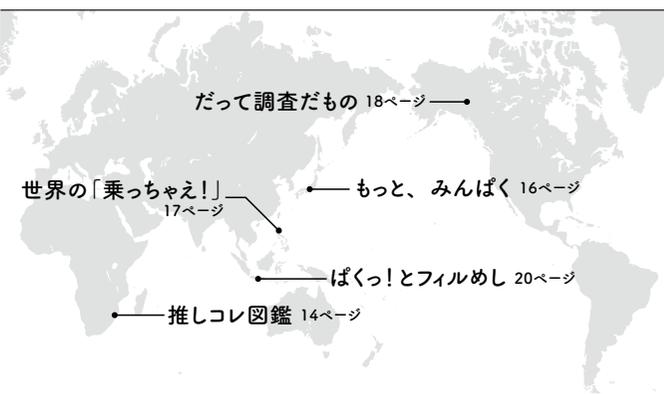
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

「オモロイことやったろ!」と、民博のご先祖さまたちが意気込み作りはじめて半世紀。その記念行事が開催されるなら粗品も要る。「じゃあ、本誌を粗品に」と勝手に名乗りをあげたとき、特集名も表紙イメージもわたしの頭のなかにならなくて。そんな思い付きにつきあってくださった執筆者、編集・デザインにかかわった皆様に心からお礼申し上げたい。

「つまらない者ですが、つまらない雑誌にどうかご一筆を」と万城目学さんに編集部から巻頭エッセイをお願いしてみたところ、なんと即答でご快諾いただいた。あろうことか、その翌日に直木賞受賞!

一日依頼が遅かったら多忙を案じてお引き

受けただけなかったかもしれない。

改めておめでとうございます。

こうしてできあがった本号を、

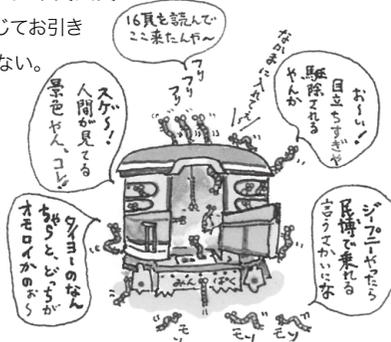
「つまらないものですが」と口

先では前置きするが、本音は

「つまらないなんて言ってみろ、

コノヤロー!」

粗品、取扱注意。(樫永真佐夫)



次号の予告 7月号

特集「夜店に行こう!」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

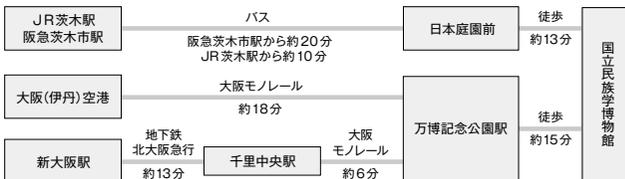
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



みんなく創設50周年募金(寄附金)のお願い

国立民族学博物館(みんなく)は、2024(令和6)年に、創設50周年を迎えます。

みんなくは、文化人類学関係の教育研究機関として、世界全域をカバーする研究者の陣容と研究組織、博物館機能を備える世界で唯一の存在であると同時に、その施設の規模の上で、現在、世界最大の民族学博物館となっています。

創設から50年というこの節目の機にあたって、私たちは、みんなくの過去の50年を振り返り、現状を見極めて、これから50年先、100年先の人類学のありかたとみんなくの姿を構想するための一連の事業、『みんなく50年史』の編纂や「館史アーカイブズ」の整備等を実施することといたしました。

いわばみんなくの第2の出発ともいえるこれらの事業を実現するため、皆様からのご支援をたまりたく、ここにご寄付のお願いを申し上げる次第です。

皆様の温かいご支援、ご協力を心よりお願いいたします。



国立民族学博物館長
吉田 憲司

詳しくは創設50周年記念特別サイトまで▼



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology